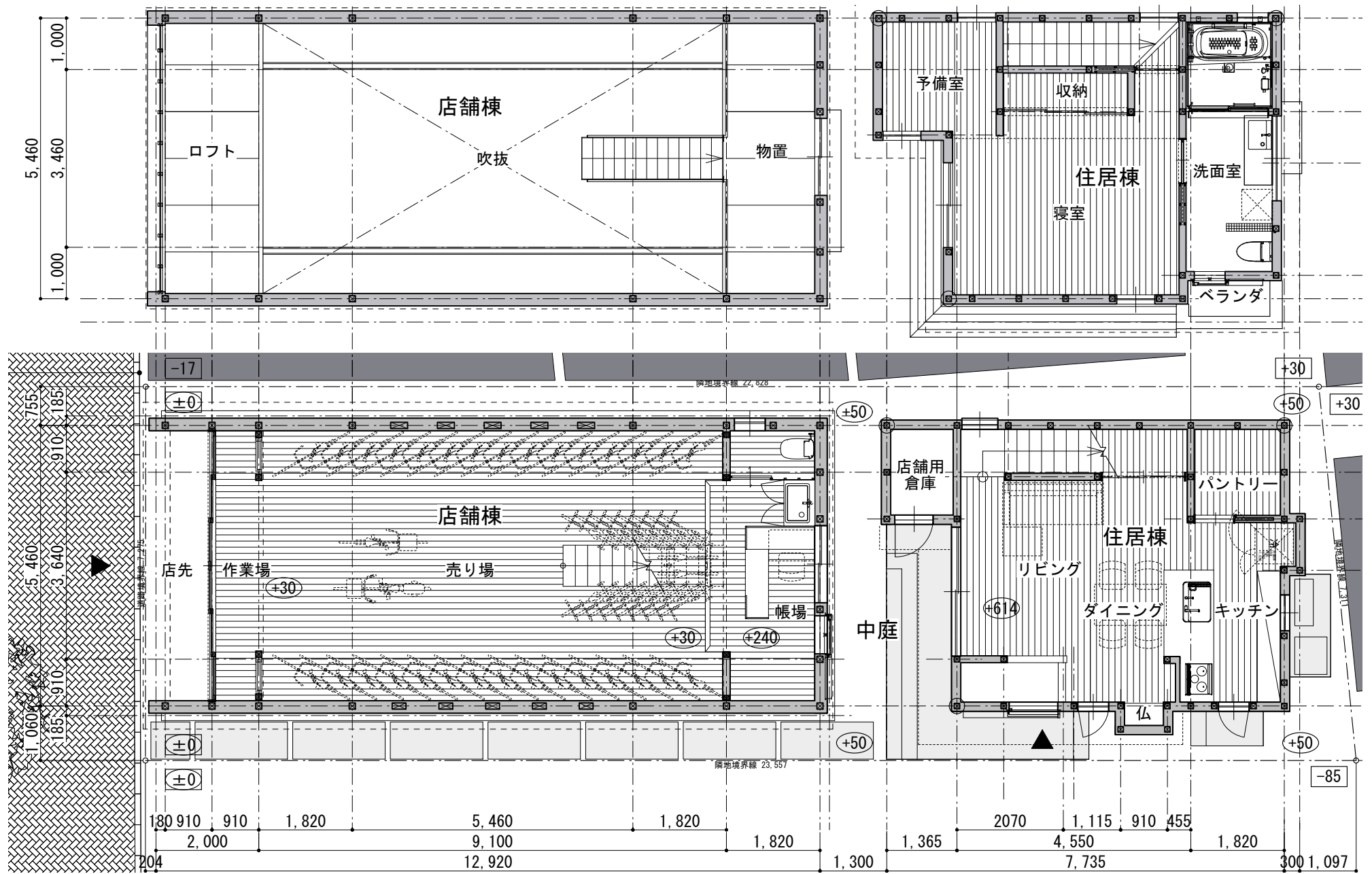
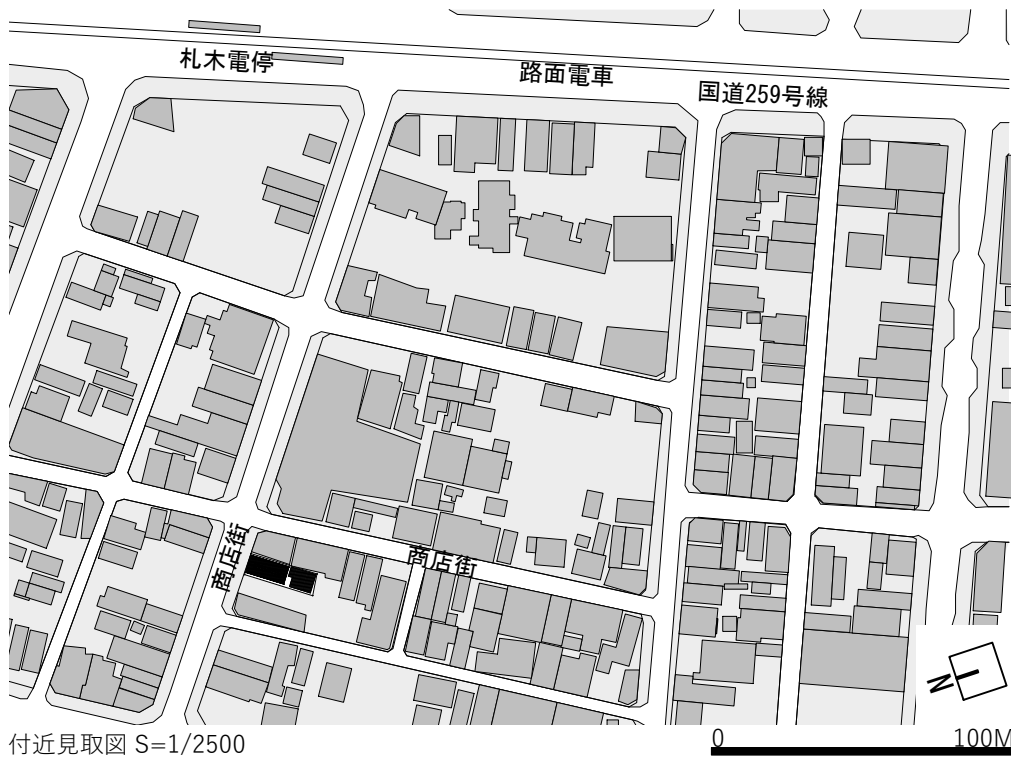




下：配置図兼1階平面図 上：2階平面図 S=1/100



付近見取図 S=1/2500

まちの自転車屋さん

中心市街地の商店街に面する昔ながらの自転車店と住居の建て替え。この場所のはかつてアーケードの架かる商店街だったが、平成の終わり頃に覆いは撤去された。建主は自転車店を営む60代の夫婦。店主が生まれる前からの家業の自転車屋を継ぎ、夫婦二人三脚で営んできた。私が高校へ通った自転車は、20年以上前にこの店で購入した。建て替え前の建物は数回の増築を重ね、店舗部分と住居部分が入り組んだ複雑な間取りになっており、老朽化もしていた。子供たちも地元を離れておのこの家庭をもち、夫婦と犬1匹で住むには広すぎるため、建て替えることとなった。

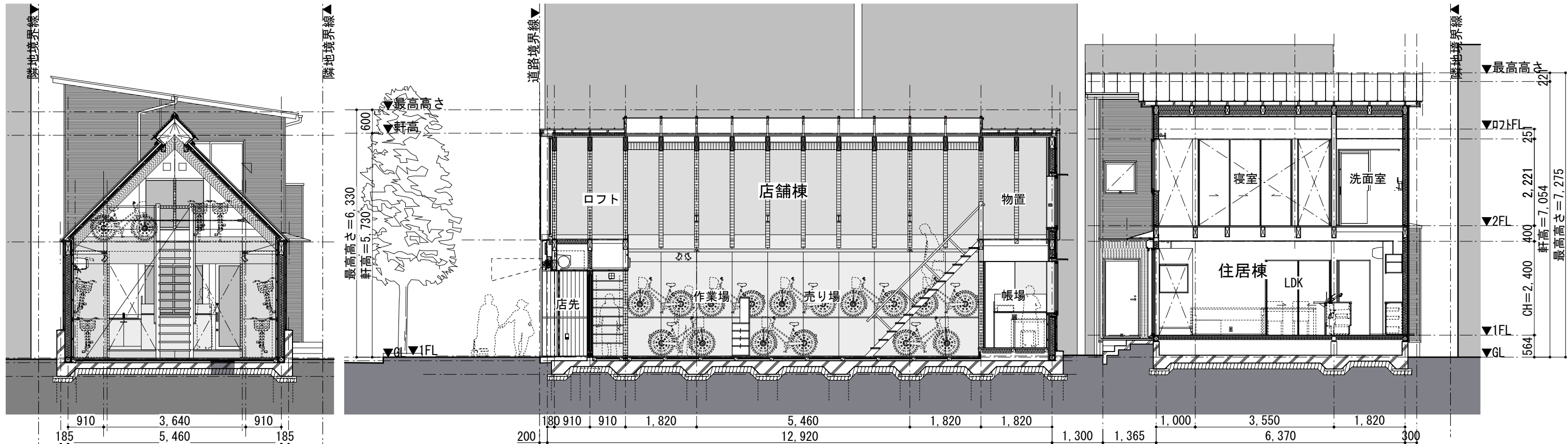
防火地域における木造店舗／住居

与えられた条件はひとつずつ。店主である夫からはとにかく店舗スペースを大きくとること、妻からは店舗を通らずに住居スペースへ行けること。敷地は防火地域であるため、床面積が100m²を超えると耐火構造とする必要があり、鉄骨造か鉄筋コンクリート造となるとコストが厳しい。夫婦の年齢と後継ぎがないことも考慮し、住居と店舗を合わせてちょうど100m²の切妻の木造平屋のプランを提案したが、

100m²では置ける自転車の量も限られ、住居部分も最小限になる。しかし、屋根のかたちは気に入ってもらえた。最終的に店舗棟と住居棟の分棟形式とし、それぞれ100m²以下の木造準耐火構造を選択した。

木の屋根に包まれた大きな気積を街に繋げる

周囲が建て込んだ南北に細長い敷地で、元の建物は薄暗い印象があったため、ここでは自然光を取り込むために北側道路に対して大きな開口を取った。三角屋根の妻壁もガラスとし、敷地の奥へと連続する単純な切妻の架構の連続が通りからも見えるようにした。さらなる明るさの獲得と通気を期待し、棟部は長いトップライトとしている。これらを実現するために、店舗棟は外壁耐火型のロ-1準耐火構造とした。そのため基礎立ち上がりをも木造の軸組みを柱の側面から支持したり、登り梁と外壁内の桁の間に耐火被覆材を挟み、グルードインロッドで接合するなど、特殊な納まりとした。店舗の奥にある住居棟はメンブレン型のイ準耐火構造とし、店舗棟とは対比的に扱った。木の屋根に包まれた大きな気積を街に繋ぎ、通りに直交する方向の奥行きを与えた。作業場を通りに近い位置に設け、通りを行く人と店主の関係性を誘発させることを考えた。



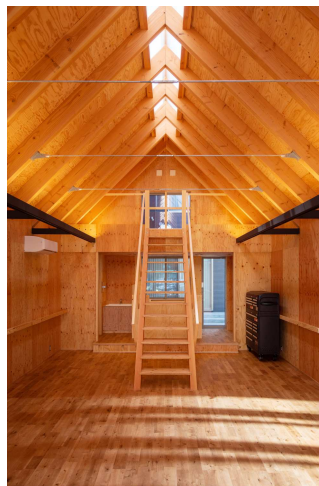
物置から前面道路側を見る。棟部にトップライトを設けている



作業場から売り場を見る。奥の帳場の勝手口から中庭を介して住居棟へ



左に売り場、右に作業場を見る。等間隔で連続する架構の影が落ちる



タイバーで屋根の開きを拘束



住居棟2階から店舗棟を見る



住居棟から店舗棟越しに道路



北東外観。東隣地は履物店



木製看板の補修と再生
 元の店舗の看板は店主が生まれる以前から使われていたもので目の詰んだ杉材であった。魅力的な看板だったので、解体時に取り外し保管しておいた。比較的、風雨による損傷は小さかったが、一部、不良部分は切除して継ぎ木をし、全体的に修理、含浸強化のうえ再塗装する補修を行った。新しい店舗では文字が浮かぶような形で取りつけることで、新しい印象を持たせつつ、旧店舗の記憶がよみがえるような看板とすることができた。



解体前の店舗



不良部の切除



不良部の切除



継ぎ木



含浸強化



乾燥



接着